りりかるなのは？

ゲーム家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
りりかるなのは？

【Ｎコード】
Ｎ７８９８Ｉ

【作者名】
ゲーム家

【あらすじ】
この世界から飛ばされてきた女の子、高町なのは？
彼女かこの世界で見たものは、自分が暮らしていた町と同じ風景であった。彼女はそこで何を体験し、そして何を知るのであろうか……
魔法少女？りりかるなのは、始まっちゃいます

これってどういうことなの？（改）（前書き）

文章など、自分は書くのが苦手であるので読みずらく、つまらなくなってしまうことがあるのかもしれません。どうか、あたたかな目で読んでいただけると嬉しいです。

これってどういうことなの？（改）

『お願い、助けて……』

……え？

「どういうことなの？『前は』こんなことが無かったのに……」

魔法……念話？

私のほかにも魔法を使う人がいるっていうの？

「とりあえず、行ってみよう……」

向かった先はとある公園の並木道…

そこには、私にとってよく見覚えのある茶色い髪をして二つに分けている女の子、後の二人は見た事がないけど、金髪でウェーブがかかっている女の子、青髪でロングな女の子の三人が道のところでしゃがみこんでいた。

（……さっき聞こえてきた声、確か男の子の声だったよね）

しかし、見た感じ男の子の姿は見当たらない。その代わりにいるのは人ではなく

「あれは、フェレットなのかな？」

茶色の髪をしている、高町なのはの腕に抱いているのはフェレットらしき動物が包まっている。動く様子はないので、気絶しているのだろう

だけど、微かにこいらの周辺で感じる魔力の流れ…その流れの感じがあのフェレットからちょっと出ているような気がする

「気のせいじゃないと思うけど、私が体験したときとはまったく違う出来事だし、この後どうなるかわからない……」

私は首を傾げる

「うーん、どうしよう。私が何でこんなところに出たのかは分からないけど……とりあえず様子をみているしかないのかな？」

フェレットを抱えたまま、三人の少女達は公園の入り口へと向かっていく。もちろん、フェレットを抱えたままで、おそらくこのまま動物病院へと連れて行くのだろう。

それに

「あの二人……、どこかで見た事があるような気がする……」

あの三人に見つからないように進んでいく私、おそらく向かう先が自分が考えているところであったため、見失うことはなかった。

私が今ここにいる町…海鳴市。私が暮らしていたはずの場所

だけど、私はここの人間じゃないんだとわかっている。

なぜなら、ここにはもう一人の『高町なのは』がいるのだから

それに、私が小学校に通っている間、あの二人の友達がいなかったことから、多分ここは私がいた世界と違うんだなと理解ができた。遠くからだったから顔がよく見えなかったけど、親友みたいな感じがした。

普通だったら、今の状態になったことに困難をしていると思う。

けど、私も『この時』、不思議な体験をしたから……わかるんだ……

ポケットの中に入っている、かつて私が使っていた『ステッキ』

本当に不思議な事だったけど、これを関わってから『魔法』という存在を知ることが出来たのだから

動物病院に着き三人は中に入る

私も中に入って、あのフェレット？の様子を見てみたかったけど…、『もう一人のなのは』に見つかってしまうため我慢した。

今私がなぜこのような世界にいるのか、あのフェレットが何かしら手がかりを持っているのかもしれない。『魔法』…それがここに私を呼んだものなのかもしれないから

……

その三人が動物病院に出てから一時間が経つ、今の時期はすこし寒く、手が震えてきた

（どうしよう……、さむいよう）

どこか暖かいところへ行こうかなとも思ったけど、もし私の姿をみた人がいれば、すこし厄介なことになると思い、我慢をしていたところ

「わ、やば、塾の時間」

「本当だ～」

「すみません、先生またあとできます」

動物病院から三人が出てきて、先生に手を振って帰っていった。

姿が見えなくなった後、私は病院の窓から中の様子を覗いてみた

中には、台の上に横たわるフェレットの姿があった

腹部と左手のところに包帯が巻かれていた

（うわ～かわいい）

前のいた世界では狐である久遠を飼っていた?が、このフェレットも劣らず可愛らしい。

私の視線を感じたのか、もぞもぞして、ゆっくりと目を開ける

そして、私と目が合ってしまった

最初は寝起きで半目で私見ていたが、数秒経ったあと目を思いっきり見開いた

「え……」

そして、よく見るとフェレットの首にかけられていた宝石らしきものが光だして、私の視界を真っ白にした。

私は私、高町なのは（前書き）

平行世界に渡った私が見たものは、見た事の無い友達…そしてフェレットであった。魔法少女？りりかるなのは…二話開始です

私は私、高町なのは

……

暗い空間で私は目が覚める

「ここ…どこ？」

《目覚めたか、イレギュラーな娘よ》

男の人の声が聞こえる

しかし、どこから聞こえてくるのかがわからないので、私はぼーと真正面を見続けていた。

《娘、願いがある》

「えーと、なに？」

声を聞くにはすこし怖そうだったけど、実はそんなに怖くはないのかなと私は思った

《すこし、あの世界を覗いていただろう》

あの世界……海鳴市のこと

「うん、あそこは私がいた町ではないよね」

そう、あそこには存在していない人や『私自身』も存在していた

一種のパラレルワールドってものなのかな？

《ああ、その通りだ…》

「何で私に頼むの。私は何も出来ないよ。今だってもう風芽丘学園生の三年生だし、特別の力を持っているわけでもない。お兄ちゃんやお姉ちゃんは持っているけど…」

そう、わたしには何も無い。ただ機械を弄ったりして毎日を過ごしているだけ。お兄ちゃんやお姉ちゃんみたいに剣を習っているわけでもない。そりゃ、私が小学生だったときには不思議な力が使えたけど…

《それだ……》

「え？」

《その力、普通の人が持つべきではない力、『魔法』。我はそれを扱う事ができるような者を探していた》

心を読まれているようであった。いや、多分読まれているのであろう。

「で、でも、私にはもう『魔法』を使えない」

あの『大いなる災い』を退けてから力がなくなった。それからの私はただ一般の人として暮らしていく事しかなかった。

《主自身はなくなったと思い込んでいるのであろう…。だが、微か

にながら魔力が奥底に潜んでいるのを我は確認した。そうであるからこそ、主をこの世界に呼んだのだ》

「……」

私はポケットの中に入っている丸く赤い宝石を取り出し見つめた。しかし見たところ反応があるようには思えないが。

《ふむ…、それが主の力を発現したきっかけとなった物か……。我にすこし見せてくれ》

手の平に乗っていたそれが浮き上がり、空中で止まった

そしてすこし、そのままの状態が数分ほど経ったあと、また私の手の平の上に戻ってきた

《確かに、それからの魔力反応がなくなったようだな》

それから、何か考えているのであろうか…沈黙がしばらく続いた

「ねぇ、あなたの名前は？何が目的で私をこのようなところに呼んだの？」

今までで一番聞きたかったことを私は尋ねた

《……む、名前は……そうだな。我の事はカラレスと呼ぶがいい》

「カラレス？それがあなたの名前なの？」

《ああ、主をここに呼んだのはある石を我に持ってきてほしく、主を呼んだのだ》

石？もしかして…

「『イデアシード』のこと？」

私がいた世界にあった不思議な石であるのではと思ったが

《いや……『ジュエルシード』という石だ》

「……、なんで私なの？私が見たあの世界の『高町なのは』に頼むことは考えなかったの？」

私が知る物とは違ったのは、まあパラレルの世界だからなのではと思ったが、どうして『私』なのか…。あの子も自身では気づいてはないと思うけど、物凄い魔力を秘めているというのは何となく分かる。そして、あのフェレットの首に掛けてあった宝石…多分あれは『レイジングハート』なのだろう。

私が関わらなくとも、いずれあの子の性格（私と同じ性格）なら自分から関わっていくのに…

《あの娘に頼むのはすこし厄介なことが生じてな…それとも主、断るつもりであるのか我の頼みを》

「私がやらなくても、いいじゃないですか……。あの子がやっても同じでしょう」

私はすこし気分が悪くなる。そして

《『彼』を甦らせるという条件では…》

「！」

なん……で

「なんで彼の事を！！」

私の中に思い浮かべるのは、微笑みながら私を見つめてくれた『彼』のこと

「クロノ君を！！」

魔法との出会い（過去1）

クロノ君ことクロノ・ハーヴェイに出会ったのは私立聖祥大学付属小学校の2年生になってから大分経ってからのことだった

まず、その出会いが起こったことについて短縮して話したいと思う

私の家族は母である高町桃子、兄である高町恭也、そして姉である高町美由希の三人で暮らしていた。それに城島晶さんは居候、鳳蓮飛さんも下宿で高町家はいつも賑やかです。父である高町士郎は自分が生まれる前に護衛の仕事で事故に遭ってしまい会ったことがない

今では何とか、落ち着いているみたいだけど、お父さんが亡くなってからはいろいろと大変だったとお姉ちゃんは言っていた

お父さんの顔はお母さん結婚したときの写真を見たりして、どういう人なのかいつも想像していた

私が『魔法』に触れるきっかけになったのは、丸い宝石を拾ったときからだった

狐である久遠ことくーちゃんと一緒にお父さんと私の友達であったアリサちゃんの花のお供えをした時に偶然につけたのだ

初めは交番に届けようと思っていたんだけど、こけてしまい宝石を落っことしてしまい、転がりみえなくなってしまった

とりあえずはそれでいつものように毎日が流れていくんだなと思っ

ていた

だけどその夜、耳から聞こえてくる女性の声で目が覚めたんだレンちゃんを起こそうしたんだど、何故か目が覚めなく、お母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんにも声をかけたんだけど、目が覚めなかった…。

お母さんはともかく、お兄ちゃんやお姉ちゃんは気配に敏感なのに、私が近づいて声をかけても目が覚めなかったのには恐怖を感じた

目が完全に覚めてしまい、恐怖があったけど、それ以上に好奇心が大きくなってしまい、私はつい制服に着替え、外に出た

私はまず八束神社に向かい、クーちゃんと合流し、あの宝石を見つけた所、藤見台墓地に向かった。

宝石が落ちていたところのすこし奥の林の場所に何かが光っているのを見つけ、そしてそこに着き、あの時落ちてしまった宝石を発見したとき、それが輝きだしたのだ

私は思わず目を閉じてしまい

光が収まったと感じ、目を開けてみると……そこには妖精さんがいた……

妖精さんとすこし会話していると自分の周囲の気配が怪しくなり、背筋が凍った

白い靄みたいなものが私達の目の前に現われ、クーちゃんはそれを撃退してくれた

その後、その妖精さんを家に連れて帰り、そこでいろいろと尋ねた

妖精さんの名前はリンディ・ハラオウンさんというみたいで、どこか遠い国からやってきたと言った

あの靄みたいなものは『ゴースト』というものらしい

そして、リンディさんの『探し物』を一緒に探してあげることにした

……

あの時の宝石をリンディさんは差し出し、私に不思議な力……『魔法』の力を与えてくれた

『我…使命を、受けたもうものなり……契約のもと。その力を解き放ち給え。風は空に、星は天に……そして、不屈の魂は、この胸に。…この手に魔法を…レイジングハート、力を』

そうした呪文を唱えた後に出てきたものは、ステッキだった。まるで、見た目はどこにでも売っている魔法少女が使うようなものステッキをクーちゃんに渡してみたところ

どうやら何かしらの気配を感じたらしい

庭に出てみると、そこにいたのは『ゴースト』であった

リンディさんが言うには、あれは人の記憶を消化……奪ってしまうというものらしい

私はそれが許せなく、夢中で唱えていた

「いや、いや！みんなの記憶を奪うなんて許せない！」

頭の中に呪文が流れてくる

「リリカル…マジカル……みんなの心を返して！」

『ゴースト』に向けていたステッキの先端が光だし、その光が『ゴースト』を包み込む

そして、それが存在しなくなり……青く輝く宝石に変わった

この場の危機がなくなったためか、安心し、私は家族のもとへ走り出した

家族全員に話をしてみたけど……どうやら大丈夫らしい

よかった…この時は本当に安心した

そして、その後は急に眠くなり、その日は終わった

動き出す運命……

それからも、私は魔法少女として動いていた

動物や人に取り付いた『ゴースト』を封印していき、すこしずつ私自身も自信がついてきた

動物もそうだけど…人の思いを取り込んだものほどややこしくなる

でもそのたびにクーちゃんやリンディさんにも手伝ってもらった

私は一人で動いているわけではない……クーちゃんやリンディさんも一緒にいるため寂しくはなかった。

でも、本音を言えば、この事をお母さんなどに話したかった。けどリンディさんの声が聞こえないなどや、いきなり『魔法』なんて言っても理解をしてくれないので仕方が無かった

私自身の日常生活と魔法少女としての自分。魔法の使い方などもすこし知っていき、一日一日が流れていった

そうしていく内に、私は彼に出会った

黒髪の、黒色のジャケットっぽい服装……そして手に持つは魔法の杖……

クロノ・ハーヴェイ……

もしかしたら、出会った事は奇跡なのかもしれない
でも……その時から彼のことが惹かれていたのかもしれない……
その時は、会話が数回あっただけで別れてしまったけど
またその後に出会う事になる

《ここ連れてくる間に心をすこし見させてもらったよ》
私は複雑の思いでいっぱいだった
（なんであの時私は気を失ってしまったんだろう！！）
今でも後悔は残っている
あの時、クロノ君との最後の会話……
《もしくは……『時間』を戻しても構わないのだが……》
「え……」
《主が後悔をしている時よりすこし前の時に……》
私は唖然とした、そのようなことができるこの人物に恐れを感じた

「そのような力を持っているのであるならば……」

《むむ、時間だ……そろそろ主が目を覚めることであろう》

覚める……その言葉に疑問に抱いた

「待って！！結局私はどうすればいいの！？」

《……主にやってもらう事は『ジュエルシード』を五つほど持ってきてもらう事、後一つあるのだが……それは前の条件を達したときに言うとしよう》

声が遠ざかっていく…

《力を貸そう…先払いだ……手を前に差し出したまえ》

私は右手を前に差し出す……

《杖を握るイメージを……》

目を閉じ杖をイメージする……しばらくすると何かが手の平に感触が現われた

開くと、全体が緑色に輝く杖みたいなものが存在していた……

《その杖の元の名は『不屈』……主に扱えるものであるはずだ》

そうして、声が完全に聞こえなくなり

私の意識も暗くなっていった

目が覚めた先にあったものは……嘗て私が暮らしていた部屋…天井が目の前に広がっていた。

「あ……」

自分はどうやらベットに仰向けになっていたらしい

ベットから起き上がり、つい鏡を覗いてみる

そこに映るのは……小学生時の『高町なのは』の姿であった

（……そういう事なの…）

つまり、あの人が言うには『高町なのは』が『ジュエルシード』を採る

そのままの意味だったのだろう

『僕に力を……貸してください。お願いです……』

「！！」

頭に激痛が起きる……

「…男の子の……声？」

耳から聞こえてくるのではなく…頭に直接響く

そして、この声は……初めに聞いた『念話』の……
窓の外を見てみると、そこには暗い空が

なるべく、音をたてないように外に出る
多分、その事はお兄ちゃんやお姉ちゃんには気づかれていると思うけど……

――――――たったったった

「っは、っはぁ」

この頃の私は運動関係はまったくというほどダメであったためすぐに息が切れてしまう

（はぁ、体力つけないと……）

それに、まだ考えたい事がたくさんある…あの杖にしろ、今ポケットの中に入っている宝石『レイジングハート』……

でも、それよりも今の私には向かうべき場所がある

そう……あの子がいる場所……

動物病院だ！！

間章1

「……ふぅ、いったか……」

彼女がいなくなった空間を見つめていた男が言った。

本当なら、彼自身が『ジュエルシード』を採って行きたかったが、彼には彼なりのすべきことがあったために向かう事が出来なかったのだ

「ジュエルシード……周囲の生物が抱いた願望を叶える物か……」

「何…笑顔でいるのよ……あなたは」

気がつくと彼の横には一人の女性が立って呆れていた

「お前か……あいつのストーカーは今はしないのか……」

彼女はその言葉に反応し

「！ち、違うわ、観察よか・ん・さ・つ」

「はぁ」

彼女の姿は巫女装束であり、手には古そうな小両刀を持っている

「……君とは、まだすこししか会っていないし……」

「はぁ、……彼はあの世界に飛んだんだよな」

俯いていた彼女は私を見て

「ええ、送ってしまった私が言うのもなんですけど……」

彼女は時を操る力を持っている、その為か『未来』を知ることも出来るし行く事も出来る。また『過去』も同様に可能である

「お前にお願いがある……」

そう言うと彼女は首を傾げる

「？あなたがお願い？珍しいですね……いいですよ。あなたには借りもありますし」

「そうか……過去に送ってほしい人がいる……」

ポカンとする彼女は、「ふふっ」と口をにやける

「わかりました……先ほどの女の人ですね……。ついにあなたにも恋というものが……」

「違う……そうじゃない。ちょっとな、あいつを見ていると昔のことを思い出してな」

「え、あ、その」

「いいんだ、俺の場合既に遠い昔の事になるし…気にするな」

彼の過去にも色々とあったのだが、彼女にはさすがにそこまで昔に返す力は無い

「…で、私だけの力ではマナを集める事ができないんですが……」

「そこは大丈夫だ……そのための物は彼女に頼んである」

「そうですか……、じゃあ私は戻りますね、再び様子を見ていないと…あいつらの動向を」

彼女は彼に背を向けて歩き出す

すこし進んだところで彼女は足を止め、顔を彼の方に向ける

「あなたも、手伝ってくだされば、こっちも楽なんですけど……そっちも急がしそうですね」

「ああ」

「あの人に、あなたのコレクションの一つを渡してしまうほどですからね……」

彼女は姿を消し、ここには彼だけが残る

「あの『不屈』だけは俺には理解ができないものであったが、彼女に反応したところ、適正があるようだな」

使えるならそれでもよし、使えなくそのままでもそれはそれでよし

アレを扱えるほどの力を持つものであるのか…

「俺がいうのもなんだが……神のみぞ知るってやつか」

そうして、彼の姿もすこしづつ薄れていく

「さてと、俺は俺で動かないとな……」

そうして、そこには誰もいなくなった空間があった

レイジングハート（前書き）

見慣れた部屋、そして頭に響くのは男の子の声……
気になった私が向かった先は動物病院…
りりかるなのは、はじまります

レイジングハート

槙原動物病院に到着した頃には既に辺りは真っ暗になっていた

入り口の目の前で立ち止まると、すこし嫌な雰囲気を感じた

「……ここに」

私は中に入ろうとした瞬間…

ドォォン！

何かを叩き割るような音が聞こえ

病室の中からあの時見たフェレットと……黒く丸い物体が出て、それが病院の外の木に追突した

ドォォン！

ぶつかった衝撃はなんとも無いのか、もぞもぞと動いており今にでも動き出しそうだ

物体から突進から避けたフェレットは私を見て飛び込んでくる

「あ……」

無事に受け止め、アレを見る

蔓みたいなものをうねうねして気持ちが悪い

「ね、ねぇ、アレって何」

正直ああいうものは苦手であったためすこし動揺してしまう

多分、このフェレットは話すことができるのではないかと思い、尋ねてしまう形になってしまった

「……僕が話せるってわかっていたの？」

フェレットはそう言うが……

「グォォォォォォォ」

「きゃっ」

とりあえず私はこの子を抱えたまま動物病院から出る

「はぁ、はぁっ、どうすればいいの！」

走りながら私はたずねる

「お願いです。お礼は後で返しますから「それよりも！」あ、はい」

私の周辺が急に暗くなる

上を見上げると先ほどのアレが

ドォォン！

落ちてきた……

何とか抱えながら転がり、避けることはできたが、足には擦り傷ができて痛い

アレは私達のことを探しているのかうろうろしている

私は見つからないように死角となる電柱の陰に隠れる

「こ、これを」

フェレットが首に掛けた宝石を口にくわえ、私に差し出す

それを受け取った瞬間、ポケットの中から光が漏れ、外に飛び出し私の前で浮かんだ

「え！？どうして『レイジングハート』がそこに！！」

私はボーっとして、フェレットが驚愕で止まっている間に……

手のひらに乗っていた『レイジングハート』が浮き上がり

二つの『レイジングハート』が一つになる

「「！！」」

その時の眩しさに目を瞑り、開くと一つになった『レイジングハート』が私の手に落ちてくる

「グルゥゥゥウ！」

先ほどの光で気づいたのかアレがこちらを発見する

私は『レイジングハート』を見て

（もう一度……私に力を貸してくれる？レイジングハート…）

その思いに答えたのかレイジングハートがテカテカと光る

「何が何だか……、とりあえず「我…使命を、受けたもうものなり…」ち、ちょ」

膝元で何かを言っているような気がしたが

「契約のもと。その力を解き放ち給え。風は空に、星は天に……そして、不屈の魂は、この胸に…」

あの時と同じ言葉が一言一言間違えずにすらすらと口から流れてくる

「この手に魔法を…レイジングハート、力を！！」

《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ　ｕｐ》

レイジングハートを中心に光出し

「えっ？」

私が想像していたことと違う事が起きる

裸？

何で？

今まで着ていた服装が消え、その上から上書きされるように違う衣装に変わっていく

全身がほとんどが白で、袖のところ等に青があり、胸のところには赤いリボンが……

そして、肝心のレイジングハートは杖状に変化していた

持ち手のところは白く、先端が核と黄色いフレームになっている

（……えーと、ステッキじゃ…なかったんだ）

自分の服装を見る…足元には桃色の羽が……

（ま、魔法少女の服装……）

「せ、成功している…！す、すごい……」

フェレットがなにやら驚いているようだけど……

「グルラァァァァ！」

「！！」

アレが私に一直線に襲い掛かってくる

レイジングハートを前に出し横に構え

「守って！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ッドン！ギギギギッ！！

私の前に赤く透明な壁ができ、アレの進行を止める

「う、うぅぅぅ！やぁ！！」

力を込め、そのまま弾き飛ばす

飛ばされたアレはバラバラになり、壁や電柱に突き刺さっていく

ドシン！

「君、こっちだ！！」

声が聞こえた方を見るとフェレットがこちらを向いていて、奥に走っていく

私も慌てて走り出す
後ろをすこし振り返ってみると、バラバラになったアレが一つにくっついていく
「ひっ！」
私もフェレットの後に追いかけていった
すこし離れたところで待ち構える事になった
その間にアレがいったいどういうものなのか
フェレットから聞いた
―私が今使ったのは精神エネルギーから使った『魔法』であるということ
―襲い掛かってきたアレは忌まわしい力の元で生み出された思念体であること
―アレを封印する呪文はすでに私の中にあるとのこと
思い出すのは
「来た！！」

フェレットの声に意識が戻って前方を見るとアレが接近してくるではないか

そして蔓を伸ばし私に迫る

「っく！」

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

魔法の壁により蔓は消滅し、アレが怯む

「今だ！！」

思いつくはあの呪文…

「リリカル…マジカル……」

「封印すべきは忌まわしき器！『ジュエルシード』」

（！……あれが…）

「ジュエルシード！封印！！」

レイジングハートから出てきたいく数のリボン状がアレに迫り、巻きつける

そして、アレの額に映るのは二十一の英数字……

《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ》

（これで…終わり！！）

「リリカル…マジカル…ジュエルシードシリアル二十一、封印！！」

《ｓｅａｌｉｎｇ》

アレに光が集まり……消滅する

「はぁ、はぁ……って、何時の間に私浮いてる！！」

「お、おちついて！ゆっくりだよ。集中して降りてきて」

「う、うん」

何とか地面に足が着き、私はホっとしていた

「これで、終わり？」

「いや、まだです。レイジングハートをジュエルシードに近づけて……」

言われたとおりに近づけると、ジュエルシードはレイジングハートの中に取り込まれる

（今回は何とか取れたけど……最低でもこれが二十一個あるのかぁ）

確か確認したところ、これは二十一だった。

でも、

「……あと、四つ……」

「？……終わりました……あなたには色々とお尋ねしたい事はあるのですが……とり…あえ……ず」

フェレットは倒れる

そしてどこからか聞こえてくるサイレンの音が……

私はフェレットを抱えてこの場を去っていった

ちなみにいつの間にか服装は家を出てきたときの服装に変わっていた

続く？

自己紹介は大切な事

とことこ……

私はあの出来事が起きた場所から、離れたところを歩いていた

今、胸に抱えているフェレットもいる

反応がないようなので……多分気絶をしているんだと思う

「あ……」

気がついてみると、今は公園の中を歩いていたようであった

周りには誰もいなく、シーンと静かな空間がそこに出来ていた

近くにベンチがあったので、そこに座り……フェレットを自分が座る横に置いて、自分も座る

上を見上げてみると、星が散乱としていてきれいだった

「ふー……」

今日あったことを思い出してみた

明らかにここは私が知っている世界とは違う

ゴーストという存在はここにはなく……ジュエルシードに取り込ま

れた？生物が暴れていた

「イデアシード……アレは人の思い出を奪ってしまうものだったよね……」

そう、今回のものとは違う

それは

（このフェレットに聞けば、分かるのかな？）

横で静かに寝ている、フェレットを見て私はボーとしていた。

「う、……うーん……！？」

気がついたようであったフェレットは急に顔を上げ、辺りをきょろきょろと見ていた

「？もう、大丈夫だよ？」

私がそういうとフェレットはこちらを見て

「あ、あなたは……すみませんでした」

頭を下げた

その姿に私は

（動物に頭を下げられるのもなんか変な感じ）

と苦笑して、ついフェレットの頭を撫でてしまった

「！」

いきなりだったので、驚いていたようであったが……私の手から離れなかった

「いいよ、気にしないで……気になった私もしょうがないんだから」

「そうですか……今更ですけど、あなたは「なのは」？」

「私の名前は高町なのは。なのはって気軽に呼んでいいよ」

何時までも名前を知ってもらえないんじゃ、何だから先に名乗っておくことにした。

「えーと、はい、なのはさん……僕はユーノ・スクライア…ユーノでいいです」

「？敬語じゃなくてもいいよ。多分だけど……ユーノ君って私と同じ位の年なんでしょ？」

「え、あ、はい「違うでしょ？」う、うん。わかったよ」

私はユーノ君が了承したのを見て立ち上がる

ユーノ君は立ち上がった私を見上げる

「じゃあ、行こうか」

そう言って私はユーノ君を自分の肩に乗せた

彼（？）はどこに行くのかと聞きたそうであったので

「私の家だよ。ユーノ君が家で飼えることができるのか、聞かなくっちゃ」

「ですが……話は」

「私は、自分の家族にもし反対だといわれても内緒で部屋に入れてあげるから安心して…」

（まぁ、多分大丈夫だと思うけど）

久遠……前の世界にいたあの娘（狐）クーちゃんも一ヶ月ぐらいだけど家族の了承を得て暮らせていたし

（クーちゃん……ここにもいるのかな？）

つい、クーちゃんがいると思われる八束神社の方を見上げる

「ど、どうしたの？なのは」

私の表情を見たのか、恐る恐る尋ねてきた

「ううん……なんでもない…。それに話は家でもできるし……行こう」

自分の家に向かって歩き出す

「う……」

「なのは？」

私は家の玄関の扉の前で立ち止まる

「いる」

「？」

何となくだけど分かる…この扉の先に誰かが立っているのだと……自分の右手にかけてある腕時計を見てみると……日付はもう次の日に変わっていた

（あう……わかっていたけど……怖い）

いるのは多分、兄である高町恭也と、姉である高町美由希であるのだろう。向こうも私がここにいるということに気づいているはずだ

すこし、足が震えてしまっているけど……開けないと先には進めない

「た、ただいまぁ～」

声を低めにしながら私は高町家に入っていった

お父さん……

扉の先にいたのはやっぱり、お兄ちゃんとお姉ちゃんでした

「「なのは！？」」

「う…！」

想像していたとはいえ、やっぱり怖い

「こんな遅くまで何をしていたんだ？」

お兄ちゃんは呆れ半分、怒り半分で聞いてきます

「そ、それは……」

「？なのは、そこにいるのは何？」

お姉ちゃんは私の肩にいるユーノ君を見つけたのか、指を指す

それに気づいたのかお兄ちゃんも注目する

「うん、私…部屋で何となく外を窓から覗いていたら、この子が家の前にいたの。それで、気になって追いかけちゃった」

嘘半分、真実半分で私は話した

「ふむ、どうしてここになのはと一緒に連れてきたのかは、何となく想像しているが……」

「恭ちゃん、お父さんやお母さんにも言わない「！」と……何？なのは」

私は聞きなれない単語を耳にして、呆然としてしまった。

（『お父さん』？……え）

「う、ううん。なんでもないよ。お姉ちゃん」

「そう？二人ともリビングで待っているから、行こ！恭ちゃん？」

「俺に命令するな……なのは。行くぞ」

私は靴を脱ぎ、お兄ちゃんとお姉ちゃんの後を追う

二人の姿が、リビングの中に入っていき、私はリビングから通路が見えない位置で一度止まる

《なのは？》

念話で私に話しかけるユーノ君……

その声に気づかず、私は緊張していた

（この中に……お父さんが）

まだ見ぬ、お父さん…高町士郎の姿を思い浮かべる

こっちの世界にいた『高町なのは』はお父さんがいて当然な暮らしをしていたのだろうか……

なぜか、私の記憶の中には『お父さんを暮らす私の姿』があった

私にはお父さんに会った事が無い……だから、これはあの子の記憶なのだろう……

「すぅぅ、ふぅぅ……」

軽く深呼吸をし、気を引き締め私もリビングの中へと入っていった

その中にいたのは

仏教面をしながら、しかしどこかしら優しさを感じるお兄ちゃんと

苦笑いをしながら、私とお兄ちゃんを見ているお姉ちゃん

そして

私の世界でも、優しく見守ってくれていた笑みを浮かべているお母さん…高町桃子と

……

今まで、ずうっと会いたいと思ってきた……だけど、もういないという事で諦めもしていた。写真の中の容姿とほぼ変わらない……

お父さんの姿が……

「とりあえず、言いたいことはありますけど……あなた」

「ああ、お帰り。なのは」

ここですこし涙腺が緩んでしまった感じがしたけど…表に出さなかった私はすごい、と後の私は感心した

「うん、心配かけてごめんなさい……」

とりあえず私は、一通りに叱られました

とは言っても、体罰があったわけではなく、ただ「次からは気をつけなさい」とのことであった

本当ならば、私は反省する場面なのだが……私にとっては初めて聞くお父さんの声に一生懸命耳を傾けていた

「ところで……その動物は…「フェレットですよ」…ああフェレットか、飼いたいのか？」

「う、うん」

私は頷く、前の世界のお母さんは、お父さんは優しい人だと話してくれたけど…今のお父さんの目は真剣な表情をしている

「なのは、おまえも知っているはずだが…うちは喫茶店で飲食を出

すところなんだ。それはわかるな？」

「……はい」

「だけど、飼いたいんだな？」

私はお父さんの瞳を見つめる

「うん！」

しばらくの間、私とお父さんはお互い目を離さず見つめあう

するとお父さんは目を閉じ、息を吐き出す

「ふ～、わかった。なのはが真剣だっているのは見て分かる。桃子、いいかな？」

「ふふ、私は賛成だったわ。かわいいですし」

お母さんは元から賛成だったらしい、お姉ちゃんの方も横目で見ると笑みを浮かべているのがわかる

（よ、よかった～）

ここで、もしこちらが先に視線を外していたらダメだったかもしれない

でも

《なのは、ありがとう》

《いえいえ》

念話でユーノ君と会話をする

「ただし、条件がある」

お父さんは再び、私の方を見る

「喫茶店の方にはあまり入れない事……ちゃんとこの子の面倒を見る事……それらを守る事ができるのなら……大丈夫だな？」

「うん！？」

そう言って、お父さんは私の傍に近づいてきて、私の頭を撫でる

（うっ……）

思わず泣きそうになる……

今まではお兄ちゃんやお母さんにしか頭を撫でられたことがなかった……

だけど、今撫でてくれているのは……お父さん……

嬉しさで心がドキドキしていた

お母さんも近づいてきて私の肩に乗っているユーノ君を持ち上げる

「うわ〜〜かわいい〜〜！」

「ずるいよ、母さん私も抱きたかったのに〜！」

お母さんとお姉ちゃんはユーノ君を構い始めた

お父さんは苦笑いしていたけど……お兄ちゃんは何か複雑そうな顔をしていた

「ねえ、なのは？この子に名前はあるの？」

お姉ちゃんはユーノ君の腹の部分をくすぐりながら私に聞く

「うん、ユーノ君って言うの」

「そっか……いい名前ね……」

こうして、ユーノ君を私の家に飼う事が許可された

その日は、お姉ちゃんやお母さんがずっとユーノ君に構っていたから、私は会話をする事ができなかったけど……まだ、日があるから大丈夫だよね？

首にかけてある宝石…レイジングハートを見る

（ジュエルシード……一個目…あと四個か……がんばらないと）

こうして私、高町なのはは前にいた世界をは違う魔法の力を得た

持っていたレイジングハートは何故か、ユーノ君が持っていた『レイジングハート』と一緒になってしまったけど……

それは明日から…何とかすればいいよね

私は、自分の机の上にある小さなベットで寝ているユーノ君を見て

「おやすみなさい…ユーノ君……」

眠りに落ちた

間章2（前書き）

出てくるキャラクターの性格が違うかもしれませんが……そこの所はご了承おねがいします。

間章2

士郎　ｓｉｄｅ

「じゃあ、おやすみなさい。お父さん、お母さん」

自分…高町士郎の娘の高町なのはがユーノを抱えてリビングから出て行く

俺はその様子をじっと見つめていた

バタン

扉が閉まり、足音がここから離れていく

「……やっぱりか…」

「父さんもわかりました？」

恭也が自分の呟きに返してきた

「恭也もわかったか……」

「え？なになに？」

自分と恭也が何か話しているのに気がついた美由希が自分達の会話に関わってくる。どうやら彼女には気がつかなかったらしい……

「いや、何でもないよ。美由希。気にしないで、もう寝なさい。明

日の朝は早いのだろう？」

「え？う、うん。わかった……」

桃子はなのはが自分の部屋に帰るのと同時にすでに睡眠に入っている。明日は『翠屋』で新しい商品を作りたいためであるらしい

美由希も部屋に戻り、リビングには俺と恭也だけが残る

「気のせいだと思ってはいたが……なのは、足運びが変わっているな……」

「ええ……」

俺も恭也も美由希もなのはが家から出て行ったことには、気配で気がついていた

その時には、いつもどおりの足音であったが……先ほど帰ってきた時のなのはの足音が変わっていた。おそらく無意識であろうが……何となく理解していた

「まぁ、いいか……もしかしたら、あの子自身から何か話してくれると思うし、今日は寝よう」

「わかった、おやすみ父さん」

恭也も出て行き俺は一人になる

あのフェレット……の事も何かしらあるのだろう

なのはは自分達には何か隠し事をしている事があるのだろうし

「俺も寝るか……」

俺にとっての一日が終わる……

なのは　ｓｉｄｅ

『僕は君の笑顔を守りたいんだ、なのは……』

「！！クロノ君！」

私は目が覚める……けど、目が覚めたところは暗闇の中だ

その中を私はきょろきょろしていた

「？」

「何をお探しなの？」

突然…自分の後ろから声が聞こえてきた…その声は自分がとても知るものであった

振り返ったところにいたのは……『高町なのは』であった……

彼女はニコッと笑みを浮かべながら

「えっと…とりあえず……初めまして、なのかな？なのはさん…」

私に挨拶してきた

「うん、初めまして…」

こうして私は、もう一人の『高町なのは』と出会う事になった

もう一人の私

……

……

……

「わたしが何でこのような所にいるのかはわからないけど……いままでのところを見ていたとすると、なのはさんがわたしの代わりに動いていたんだね……」

「いままで？」

私は首を傾げた…この子はいったいどこから見ていたのだろうか

「なのはさんの視界で見えていたんだよ……」

「そうなの……」

「はい、そして謝らなければならない事があるんです。ごめんなさい！ここにいる間、なのはさんの過去を見てしまったの……」

（クロノ君のことも……だよね）

「ううん、それはお互いさまだよ、私が今あなたの代わりにこの世界にいるのだから……」

私も謝る。自分がこの世界…この子として来た時、私が見た『高町なのは』はいったいどうなってしまったのだろうか……

だけど、その子は今私の目の前にいる…その事にすこし安心してしまった

「だけど、魔法って本当にあったんだ～。いままでずっと本の中でしかないと思っていた」

前にいた私の世界での『魔法』、そしてこの世界での『魔法』……

「うん、そうだね……」

「そして、なのはさんの世界にはおとうさんがいないだね……」

彼女はすこし悲しげな顔をする

私の世界には、お父さん…高町士郎が存在せず、代わりにフィアッセ・クリステラ、　城島　晶、鳳　蓮飛…彼女達が存在している。だけど、この世界では逆になっている。

（クーちゃんはいるのかな？）

私はパートナーであったあの子の事を思い浮かべた……

「なのはさん……」

「何？」

彼女が私に話しかける

「わたしはどうやら表だっては出れないようだから……なのはさんの望みが叶うまでサポートしたいと思うんだけど…構わないかな？」

「あなたはそれでもいいの？」

本来はこの身体は彼女の物であるはずなのに、彼女は私を支えてくれる

嫌ではないのだろうか…

「何も知らないのであれば…イヤッていうかもしれない。だけどなのはさんの事を見ると……ううん、わたしが協力したいと思ったんです！何も出来ないかもしれないけど…、この世界でなのはさんがわからないことがあれば、教えてあげる事ができるし……」

「……ありがとう。しばらくの間、お願い……」

「ううん、こちらこそ……なのはさん…こういうのも変だけど、がんばって！」

「うん」

彼女の身体が光に包まれ、私の中に消えていく

「私がこの世界での、役割が終われば…あの時に戻れる。そして、あの子にこの身体を返すことができる……」

私はよりいっそう頑張る事を『レイジングハート』に誓う

『……ｅｒ』

「？」

どこからか、声が聞こえてくる……

『Ｍａｓｔｅｒ』

私は声がする方向に顔を動かし、目をすこし見開く

そこには

『Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ，　Ｍａｓｔｅｒ』

テカテカと光るレイジングハートがあった

ここは私『高町なのは』のベット……昨日…いや違う今日のあの後、グッスリと寝ていたらしい

目覚まし時計を見る

「……五時半……まだ早いよレイジングハートォ」

『Ｓｏｒｒｙ，ｂｅｃａｕｓｅ ｍｙ ｂｏｄｙ ｃｌｏｃｋ ｈａｄ ｂｅｅｎ ｉｎ ａｎｄ ｏｕｔ ａｔ ６』

「……体内時計？ごめん、レイジングハート…日本語で話すことってできるかな？」

一応、英語でも聞き取る事はいくらかできるのだが……出来ればという思いで聞いてみる

すると、またテカテカと光り

『ＯＫ……これで、いいでしょうか』

「うん、ごめん。あと一時間したら起こしてくれる？今は、た…だ、ねむ……ｚｚｚ」

言いかけてもう寝てしまう

『了解しました……お休みくださいませご主人様』

とレイジングハートの声が聞こえてくる感じがした……

日常生活

ｐｉｐｉｐｉｐｉ…バシッ！

「う、うーん」

『マスターおはようございます、朝です』

目覚まし時計を止めた私は上半身を起こして、周りを見る

ユーノ君は……まだ寝ているみたいだ

「おね坊さんなのかな？」

レイジングハートをポケットの中に入れ

ベットから降りて、私は一階へと降りていく

一階に着くころに、台所の辺りからいい匂いがしてきたので、そちらに向かってみるとお母さんが朝ご飯を作っていた

「おはよぉ～、おかーさん」

「あら？おはよう、なのは。洗面所で顔を洗っていきなさい」

「うん」

まだ、思考がはっきりとしていなかったため、頷き…洗面所へ行った

ばしゃばしゃ

両手で顔に冷たい水をかける

この冷たさがぼんやりとしていた自分の思考をはっきりとさせる

「うん」

私は完全に目を覚まし、再びリビングへ向かうとお母さんはお皿に盛っているようであった

「なのは～、顔を洗ったら、道場にいる三人を呼んできてくれない？朝ご飯の準備がもう終わるから…！」

「わかった！」

三人……お兄ちゃん、お姉ちゃん……そしてお父さんだろう

私は離れにある道場へと向かう

ここの世界の家は、私のいた世界の家の構造が同じであったため、迷う事はなくすぐに目的地に着いた

お兄ちゃんとお姉ちゃんは木刀で打ち合っていて、その様子をお父

さんが見学している

「やぁぁぁ！」

「ふっ！」

やっぱりこの世界のお兄ちゃんは強い……お父さんという存在がいるから、さらに強くなっているのであろうか

お姉ちゃんも、肩で息をしているけど表情はいきいきとしている

その様子が私にとってはすこし羨ましかった

「お？なのは、どうした？」

私を見つけたお父さんが声をかけてくる

「お母さんが朝ご飯ができたから呼んできてって」

「そうか…わかった。二人とも中止だ」

お父さんの声にお兄ちゃんとお姉ちゃんの動きが止まる

「ふぅ。ありがとうございました」

「はぁはぁはぁ、ありがと……ございました」

どちらが疲れているかは目に同前だけど、二人は満足していた

「恭ちゃんはやっぱりつよいなぁ〜」
床にへたり込むお姉ちゃん……私はお父さんの傍に置いてある、たたまれていた二つのタオルを持ち、二人のもとへ向かい、差し出した
「なのは、ありがとう」
「ありがとーなのは」
「うん、私先に行っているね」
私がそう言うと三人は「わかった」と言い、見送っていた
『マスター……ユーノはどうしますか』
「……そっか、ユーノ君はまだ寝ているんだよね。今日は私学校があるということを言わないと……」
リビングに向かう前、私は一度部屋へ戻る
ーキィィ
部屋の中に入ると、既に寝巻きから出ていて、入ってきた私を見ていた
ユーノ君はさっき目が覚めたみたいだ
「なのは……おはよう」

「うん。ユーノ君私今日学校があるんだ」

「学校？」

一通り学校の事を説明し終わると……ユーノ君は一人で頷いていた

「そうか……なのは、学校にいる間は念話で話をしようか。授業中は大丈夫？」

「問題ないよ」

もともと、自分自身は高校生までの知識はあるのだから、小学校の勉強はそんなに集中していなくても大丈夫だ

「それと……レイジングハートを僕が預かってもいいかい？気になることがあって……」

「うん、はい」

レイジングハートを私は差し出すとユーノ君はそれを咥えて、机の上に置く

「ユーノ君は何を食べるの？」

「なんでも大丈夫だよ」

「わかった、じゃあクッキーを持ってくるね」

私はその後、クッキーをユーノ君に渡し、朝食を摂った

食べ終わってからは、そろそろ出発の時間であったため、急いで制服に着替え、家から出る

「行ってきまーすっ！」

私はバス停へと向かう

バス停まで到着すると、既にバスは来ており中に入る

「なのはぁ～！」

入ってから声がしたため、声がした方向を見ると、バスの後頭部のところに二人の女の子がいた。金色の髪と紫色の髪、二人も自分と同じ制服を着ていた

「……っと」

―アリサちゃん、すずかちゃん

「アリサちゃん！すずかちゃん！おはよう！」

今頭の中に浮かんできた二人の名前……こちらの『高町なのは』の友達なのだろう

確か……最初に見たときも二人がいた

「うん、なのは。おはよう」

「なのはちゃん、おはよう」

アリサ・バニングス、月村　すずか、それが彼女達の名前だ

（？月村？）

聞きなれた名前であったので、すこし気になる。

私のいた世界では……いなかったはず

彼女の姿をもう一度見る

（妹……なのかな？）

「何？なのはちゃん？」

私の視線に気づいたのか……彼女は私を見返す

……多分そうなのだろう。忍さんに似ている

もしかしたらこの後わかるかもしれないと思い、彼女達の会話に加わった

彼女達はすでに病院でのことは知っていたらしい

さすがに『魔法』が原因でああなったということは、わからなかったらしいけど

フェレット……ユーノ君のことが心配してそうだったため、今私の家にいるということを話す

その事を聞いて、二人が安心していたことが見てわかった

学校に到着し、私達三人は教室へ向かう

私達は同じ教室であったため、三人で会話をしながら歩いて行った

八束神社その一

―ズキッ！

「いたっ！」

周りには障害物となる木がある中、私は走る続ける

止まるわけにはいかない

止まって、自分に何かしらあったとしたら、今度はあの女の人が『アレ』に襲われてしまうかもしれないからだ

今も気絶しているため、誰かが見つけて助けていてくれればいいけど

人が周りにいる様子はなかったために期待ができない

だから、私は『アレ』をこっちに呼び寄せた

対抗できるものは今、ユーノ君に預けてしまったために、逃げ続けているしかない

ユーノ君も念話でこっちに向かっているようであった

（どうやって、家から出る事ができたのだろう）

と、思ったが考えるのはやめた

―ガサ、ガサガサ

後ろから『アレ』が追ってくる

ここは、八束神社……の裏の林

どうして、今の状況になったのかと振り返って見る

――――――――――――――――

キーンコーンカーンコーン

学校の最後の授業が終わり、今はホームルームを行っていた

先生が行事のことなどを話している中

私はユーノ君から、あの石…ジュエルシードのこと等について念話をしていた

《なのは、今日はすぐに家に帰るの？》

《どうなんだろ……学校から出たときに、またこちらから伝えるから》

《わかった、待ってるよ》

そうして、先生の話が終わるのと同時に念話を打ち切る

終わってからは生徒たちはそれぞれ教室からでていった

「なのはちゃん」

ランドセルに教科書を入れている時に、近づいてきたすずかちゃん

「なに？すずかちゃん」

「うん、今日アリサちゃんの家で勉強会をするんだけど、どうかな？」

勉強会……

「ごめんね、今日は忙しいんだ。明日なら大丈夫だけど……」

「ちょっとアリサちゃんに聞いてみるね」

そう言い、すずかちゃんは私と同じくランドセルに荷物を詰め込んでいるアリサちゃんの所に向かった

二人はすこし話をして、アリサちゃんは頷いた。そして、すずかちゃんはまた私のところにきて

「アリサちゃんもそれでいいって」

「ごめん」

アリサちゃんにも視線で謝ると、「いいわよ」と許してくれていた

「じゃあ、私帰るね。バイバイ、すずかちゃん、アリサちゃん」

私は手を振り、教室から出る

校門から出た私は、この世界にクーちゃんがいるのかが知りたくなり

《ユーノ君、帰りにちょっと寄り道してから帰るね》

《そっか》

私はバスに乗り、八束神社に行く

バスから降りて、神社へと続く階段を登りきった私が見たものは

私の世界にもあった八束神社とまったく同じであった

「それも、そうだよね」

納得しながらも、進んでいると、一人の巫女さんが箒で葉を片付けているのを見た

彼女は私に気づいたのか、掃除するのを中断し、こっちに向かってくる

「あら、あなたは……高町先輩の……」

「妹です。高町なのはです」

「なのはちゃん？私の名前……覚えている？」

知っている。神咲那美さんだ

やっぱり若い姿のままであった

「神咲さんですよね？こんにちは」

ここの世界での私はそんなに、那美さんに会っていないようであった

「うん、こんにちは。今日はどうしたの？」

「ええと……」

久遠……クーちゃんの事を言っていいのか迷った

そんな様子を見た彼女は何を思い出したのか…

「そうだ！高町先輩にお尋ねしたい事があったんだ。なのはちゃん……今先輩家にいる？」

「いるよ、多分道場にいると思う」

「そっか……ごめん。ちょっと出かけてくるね」

そういうと那美さんは、巫女装束のまま階段を駆けていった

（……天然さんなのかな？）

心の中で苦笑しながら私はクーちゃんを探す

間章3．1

「ん～～」

僕、ユーノ・スクライアはなのはの家、なのはの部屋で赤く輝く宝石を眺めていた……

なのはは今学校にいて、家にはいない

そのため、ここにいるのは僕だけなのだ

「レイジングハート……おかしくなったところはないな」

昨日、起こった出来事でいくつかおかしなことがあった

一つは、なのはが『レイジングハート』と同じものを所持していたということ

二つは、そのレイジングハートが一つになってしまったということ

三つは、なのはが僕の知らない呪文で『レイジングハート』を起動する事ができたと言う事

他にもいくつか気になることがあったが

今はそれだけのことに頭を悩ませていた

あの出来事が終わった後、僕はなのはの家に連れていかれ、ペット

として家に居続けるとこができるようになった

（……僕、人間なんだけどな）

まぁ、それは仕方ない事だ

僕が人間であるという事を彼女達（高町家の人達）には知られていないのだから

本当なら、すぐにでも人間の姿に戻れる事ができるのであればいいだけど、ジュエルシードを宿したものとの闘いで、僕の魔力を使い切ってしまった

今戻っても、数分ぐらいで今の姿（フェレット）になってしまう

だから、僕の体調が回復したらすぐにでも言わなくてはならない

どう反応するのか……それは今はいいだろう

今は

インテリジェントデバイス……それがレイジングハートのデバイスの種類だ

そのデバイスは、自身に判断力や行動力があり、使い者の手伝いをしてくれる。いわば『パートナー』みたいな存在だ

スクライア一族の長老から預かりしたもので、僕には相性が合わな

かったけど、一応僕にでも扱う事が出来た
なのはがレイジングハートを扱うのを見たとき、これは彼女のためのデバイスだったんだなと納得できた
もし、もしも、彼女がこのデバイスを扱っていくのであるのであれば、僕は彼女に安心してことができるように見ておかなければならない
僕一人でジュエルシードを回収することができるのであればそれでもいい
（だけど、僕だけではもう）
魔力の低い僕には難しいことであった
さっきからレイジングハートに呼びかけているけど、反応がない
まるで、奥底からプロテクトが掛かっているみたいだ…
「どういうことなんだ……」
その事に一層頭を悩ませる事になる
なのはが授業を受けている間、僕はなのはと念話をすることができた
勉強は大丈夫なのと僕は言ったけど

《え？うん。問題ないから、心配しないで》

と声からも苦笑していることが目に見えていた

《なのは……レイジングハート、どこにあったの？》

《落ちていたの》

は！？

僕は驚いた。ありえない、ここ地球と言う場所には『レイジングハート』を作る技術はないはずなのだから

いや、そもそも……魔法の存在だってわからないはずだ

だけど、なのはは落ちていたをと言葉を曲げなかった

（？以前に誰かが彼女に託したのか？）

僕はそう思っていたが、その様なことが本当にあるのかと疑問に思った

彼女は魔法と言う存在を知って…使っても驚いてはいなかった

宙に浮いたときには確か、慌てていたということがわかったけど

魔法を不定していない……

僕としては助かるけど……いいのかな？

結局彼女から、有力な情報を得ることができなかった
仕方ないので、僕がなのはを巻き込んでしまったことについて話すことにした
その事を聞いたら
《そうなんだ……うん、私も協力するよ！》
彼女は協力的であった
なにが、彼女を動かしているのでいるのか
僕は、パズルのピースが埋まらない状態のような気がしてもどかしい
彼女はどうやら寄るところがあるらしい
帰ってきてから話がしたかったけど、用事があるのなら仕方が無いと机の上にあるレイジングハートを見ると、いままで反応を起こさなかったものがテカテカと光っているではないか
僕は食べていたクッキーを床に置いて、レイジングハートに近づく
《……スタ》
「？どうしたんだいレイジングハート」
僕は何かを言うレイジングハートに耳を傾ける

《マスターが危険です》

「え！？」

マスター？一瞬誰のことであるのかと、考えてしまったがすぐに思いに当たった

高町なのは

彼女の事だ

僕はレイジングハートに尋ねる、今どこにいるのかについて

レイジングハートから出てきた光がある方向へと照らす

その方角を僕は魔力の反応を探ると……あった！

その時、ジュエルシードの気配が現われる

《なのは！？》

僕は叫ぶ

《ユーノ君！？》

《なのは、君の近くでジュエルシードの反応が》

《う、うん。今、目の前に……》

何だって！！今のなのはは無防備当然だ

僕の元にレイジングハートがあるのだから

《なのは！何とか僕がそっちに行くまでもって》

《えい！！》

？

なのはは掛け声をあげた

《にゃぁぁぁ！？》

「！くっ！」

僕は一時期人間の姿に戻り、窓を開ける

そして、またフェレット状態になり、窓から出る

もちろんレイジングハートを身に付ける

「待ってて！！なのは！」

僕は駆ける

おまけ

―　恭也　ｓｉｄｅ　―

「む！？」

リビングにくつろいでいたが

突然現われた気配で俺は見上げ

素早く行動する

目指す先は……なのはの部屋だ！！

―バンッ！！

扉を開けると、そこには誰もいなかった

ただ、窓が開いているだけで人の気配を感じられなかった

「……窓が開いている……」

そして、あの動物…フェレットがいない

「窓から出たのか……」

俺はどう言い訳しようか考えていた

（特に、なのはやお母さんは可愛がっていたが……）

それに先ほどの『人間の気配』……

どういうことなのか……

間章3．2

僕はなのはの魔力を追って駆けていく

長い階段……僕（フェレット）にはそう感じるんだけど、何時までも続きそうな感じであったためすこし苛々していた

ようやく、のぼりきることができるとそこには女の人が倒れているではないか！

心配になった僕は駆け寄ってみると、どうやら気絶しているだけなようで傷などはなかった

「だけど……ここからジュエルシードの反応があったんだけど……」

周りを見渡しても、なのはや『ジュエルシードに取り込まれたもの』は見つからない

どこにいるんだともう一度なのはの魔力を探ろうとすると

ーズゥゥン！

衝撃が僕の居る場所まで響いてきた
発生地は目の前にある神社の裏からだ
そこには林がある
《ユーノ……マスターは》
「わかっている！今！」
僕は再び駆ける
今でも何かしらが暴れていることがわかる
急がなくては！？

木で先の様子をよく見る事ができないが
どんどんなのはに近づいているというのがわかる
そしてジュエルシードも
僕は自分の身体に鞭を打って、スピードを上げる
ようやくその場について、僕が見たものは

木を背に逃げる事が出来ず、追い詰められたなのはと
そのなのはにジリジリと近づいている元が犬のようなものがいた
なのはは僕に気がついていない
音をたてないようになのはに駆けようとしたが
ーボキッ！
なのはは足元の木の枝を折ってしまった
「きゃ！」
その音に反応し、犬もどきがなのはを襲う！
「なのは！っく！！」
あとすこし！
あとすこしなのに！！
僕は今から起こることが恐ろしくなり、目を閉じてしまった
「ぎゃん！！」
？
今聞こえてきたのはなのはの声ではない

目を開けると犬もどきはなのはからすこし距離をとっていた
見ていると、なんだかビクビクしている
なのはは……
「え？……なに……この声……あなたは誰！？」
一人で何かしら叫んでいた
「なのは！」
今がチャンスだと思った僕は、なのはに近づく
「？ユーノ君？さっきのユーノ君が守ってくれたの？」
「さっきの？」
覚えがない
それどころか僕は恐れるあまり目を閉じてしまったのだから
だけど今はそれどころではない
「レイジングハートを」
僕は咥えていたレイジングハートをなのはに渡す
「今は……ユーノ君ありがとう！！レイジングハート！お願い！

？」

《イエス、マスター。ｓｅｔ　ｕｐ》

「セットアップ！！」

なのはは呪文を唱えることはなく、起動することができた

バリアジャケットを羽織ったなのははレイジングハートを犬に向けて

「これからが本番だよ！」

張り上げた

すこし涙目だったかもしれない……

八束神社その二

神咲那美さんとが神社から去っていくのを私は見ていた

「……探そうか…いるのかな？クーちゃん……」

この世界には『那美さん』は存在していた

だから、クーちゃんも一緒についてきたのかなぁと私は考えていた

「くー……違う、久遠ー？」

私はクーちゃんと言おうとしていたが、ふと言い換えた

この世界にいる『クーちゃん』は私の事を知らないと思うからだ

「久遠ー？」

名前を読んでも出てくる気配がない

（いないのかぁ）

すこしがっかりした

自分がここの世界にいるからって久遠も『記憶』を持ってくるなんてありえないから

「ふぅ」

「！」

え？

ーガサガサ

茂みの中から、顔を覗かせるのは……狐の顔

「久遠？」

「！？」

久遠は私の呟きを聞こえたのか、ビクリとし、茂みの中に戻って行ってしまった

私はゆっくりとそちらに歩いていく

茂みのそばによって

「クーちゃん？」

今度は、愛称で呼んだが反応がない

中を見てみると、そこには久遠がいなかった

「やっぱり、ここでは初対面だから、まだ私の事が怖いのかなぁ」
私は諦めて神社から出ようとしたその時
―キンッ！
頭に何かがよぎる
「これは……ジュエルシード！？」
「きゃぁぁぁぁぁ！！」
私がジュエルシードの気配が近くにあると理解したとき
女の人の叫び声が聞こえてきた
鳥居のところから聞こえてきたため、私はそちらの方に向かって走っていった

鳥居の場所へ駆けつけた私が見たものは、ユーノ君を初めに遭遇したモノと似たようなものであった
今回のはすこし犬の形がしていたので、ジュエルシードによって望まれたものは犬ではないかと考えた
「あ！」

私は、もぞもぞとしている犬のようなモノの近くに女の人が倒れているのを見つけた

《なのは！？》

ユーノ君からの念話が来た

だけど、今頭の中にあったのは、あの女の人からアレから離さなければならないということでいっぱいだった

《君の近くでジュエルシードの反応が》

《う、うん。今、目の前に……》

考えている場合ではない

私は下に落ちている大きめな石を手に取り、アレに投げつけた

「えい！！」

―バッッ

「グググググウッッッグウ！！」

アレの瞳がどちらに向いていたのかがわからなかったが、瞳はこちらに向けた

あれは怒っている目だ

何となくわかる

そして、アレがこちらにじりじりと近づいてくる
どうやら、こちらの方に気を寄せる事に成功したようだ
「にゃぁぁぁぁ！？」
私は神社の裏にある林に向かって走り出した

（こわい、こわい、こわい）
なんであんな事をしてしまったのか
こんな事をしなくても何かしら他の方法があったのではないか
そのようなことが頭の中で一杯になっているなか
私は、林の中を走る
木の枝に引っかかったりして
服の所々がボロボロになっていたけど
後ろからアレが追ってくるのがわかるため、止まる訳にはいかない
ユーノ君も今こっちに向かってきているらしいので、それまで私は
アレから逃げ続けていればいい

（だけど、おかしいな）

追ってくる気配はあるのに、姿が現さない

まるで、私を追い詰めているかのようにも感じられる

初めのアレには野生的で、知能が感じられるようではなかったけど、今度のはそういうものがあるようだ

―バタンッ

私は根に引っかかってこけてしまった

「っう！」

（痛い！）

痛いあまり泣きそうになるが、

アレがこっちに向かってくるスピードが速くなったことがわかり、素早く立ち上がる

アレが急に姿を現し、私は思わず転がって避けた

何とか避ける事はできたが

全身が痛い

アレも私が避けたせいで、後ろにあった木にぶつかったけど、まるでなんでもなさそうにスクッと立ち上がり、こちらを見る

私はゆっくり立ち上がって、すこしずつ後ろに下がる

じりじりと私に近づいてくる犬もどき

―ドン

私は背中に何かがぶつかる

木だ

私はいよいよ追い詰められてしまった

そんな私の様子を見たアレは、私に飛び掛ってきた！

（もうダメ！）

私は目を閉じる

【……死……て……！】

頭に響く声

―ドンッ「ぎゃん！！」

私は目を開くと、迫ってきたアレは私の目の前に現われた緑色の壁にぶつかり、後ろに飛ばされてしまった

「え？……なに……この声……あなたは誰！？」

先ほどの声に返事を返そうとしたが反応はない
どうなったのか、混乱している私の所に
「なのは！」
ユーノ君が口にレイジングハートを咥えながら駆けてきた
「レイジングハートを」
私はユーノ君からレイジングハートを受け取り
アレに視線を向ける
何故かビクビクしているが、退くような気配はなかった
「今は（考えていても仕方が無い！）……ユーノ君ありがとう！！レイジングハート！お願い！？」
《イエス、マスター。ｓｅｔ　ｕｐ》
「セットアップ！！」
私は光に包まれ、あの時の服装と杖と所持（レイジングハート）した姿になる
レイジングハートをアレに向けて
「これからが本番だよ！」（今までの仕返し！覚悟して！！）

叫んだ

心の内では違う事を……

八束神社その三

……

目の前にはすこし巨大な犬モドキがいる

私は深呼吸をし、相手を見る

アレは私の様子を見ているのか、動く様子はない

というか……目が二つではない

四つある

ビックリだ

（落ち着いて、ここは林の中……木が障害物となっているから気をつけないと……）

前回とは違い、ここは行動範囲が狭い場所である

そのため、大雑把な動きはあまり許されることではない

「ユーノ君、ここではどのようにしたらいいのかな？」
私は、ユーノ君なら何かしらアイデアがあるのではないかと思い、尋ねた
「実は、そのレイジングハートには相手と直接組する魔法が少ないんだ……だから、広い場所に出て戦う方がいいんだけど……」
「そっか……」
「しかも、今回は動物を取り込んでいる……、実体がある分、前回よりも手ごわくなっている」
（だからかぁ……）
前の世界での戦いでは望み…願いの力により相手を封じる事ができた
（……『想い』？）
確か……リンディさんは
『レイジングハートは、基本的あなた、高町なのはさんの願いであれば、どんな事でも叶えうる力を持っているんです』
『こうしたい、こうありたい、と強く強く願うことによって、［魔法］は効果を持つようになるんです』
そう言っていた記憶が頭の中から引き出されてきた

けど、ここにあるレイジングハートは前の世界のレイジングハートではない

この世界のレイジングハートと融合？してしまったのだから

「なのは！！」

私はユーノ君の声に気づく

犬モドキが私に迫ってきたのだ

「！守って！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ーガガガガガ

相手の力が強いのか、障壁を張ったまま自分は後ろに下がる

「うううぅ！ま、負けないんだから！？」

『想いは力になる』

ーバァン

私はレイジングハートに力を集中させ、犬モドキを引き離す

（やるしかない！）

「レイジングハート！空へ」

《ＯＫ》

空へ飛ぶというのは、正直今でも私はすこし怖く感じるけど、アレと戦うにはここは狭すぎる！

私は空中に浮き上がり、空へ飛ぶ。そして、林の上で停止して下から来るのを待ち構える

『想い』

私は射抜くイメージを頭の中で想い浮かべる

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ》

レイジングハートの先端が形を変形する

そして下に向ける

「そ、そんな……僕、そんなことは知らない」

ユーノ君は驚いているみたいだけど、今は集中させる

レイジングハートが変わったからといっても、成功するとは思わなかったからだ

何となく、レイジングハートに魔力が集まっていくように感じられる

いきなりぶっつけ本番

失敗しちゃったら、私は……

下の木から、アレが飛び出してくる

私は目標が迫ってきたと、魔力で感じ、目を開けて言う

「シュート！！」

《ｆｉｒｅ！》

アレに向けていたレイジングハートの先端から桃色の光弾が放たれる

そして、

―バスゥン！！「ギャ！！」

一直線に狙いをつけていた先にいるアレに直撃する

光弾を受けたアレはダメージを負ったのか、地面に落ちていく

「なのは！今だ」

「うん！」

ジュエルシードを封印を封印するための呪文を私は唱える

「レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ》

変形したレイジングハートを犬モドキに向け発動させる

リボン状のものが犬モドキに巻きつき、落下スピードを落す

そして、その額に映るのはＸ??という数字

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ．Ｒｅａｄｙ．》

「リリカルマジカル、ジュエルシード十六、封印！！」

《Ｓｅａｌｉｎｇ》

悲鳴あげながら、少しずつ小さくなっていく

そこから、青い宝石が浮かび上がってきた

「ジュエルシード……」

ジュエルシードに取り込まれたと思われる子犬も光に包まれながら

傍に浮かんでいる

私はジュエルシードをレイジングハートに入れ、子犬を抱きこみゆ

っくりと下に下りていく

「終わったんだ」

「ユーノ君……そうだね」

私達は今更ながら、あの女の人のことを思い出し、鳥居の方へ向かう

近くまで行くと、女の人はもうすぐ起きだすのか動きが見られた

私は抱えていた子犬を下に放ち、飼い主だと思われる女の人の方へ

と指をさす

子犬はご主人に気づいたのか、そちらに駆けていく

途中、こっちの方に振り返ったけど、手を上に振り見送った

その女の人はペットが居るのを見つけ、抱え、神社から急ぎ足で去っていく

「って！なのは！！あの女の人の記憶が消えてないみたいだ！！」

「ちょ、それって、やばいよね！！」

私達は急いで女の人を追いかけて行った

何とか追いついて、『今まで』の記憶をなくす事ができた

息が思いっきり切れてしまったけど……

「終わりよければそれでヨシだよね……はぁ……」

「お疲れ様、なのは」
ユーノ君はずーっと私の肩に乗っていたから疲れていない
だから、私はそんなユーノ君を妬ましく見ながら
「ユーノ君はやれなかったの？」
「で、できるけど……何となく…なのはがやった方がいいような気がして」
むぅ、私の事を信用しているのか
そんなことを考えている中、私は家に到着しドアを開ける
「ただいまぁ～」
「む！なのはか……すま…ん？」
玄関のところに居たお兄ちゃんは私の肩を…ユーノ君を見て言うのを戸惑う
「なのは、ユーノはどこで、見つけてきたんだ？」
「え？」
《ゆ、ユーノ君！……どーやって、家から出てきたの？》
《…！窓からだけど》

「にゃ、ははは、ユーノ君とは神社の所にいたんだよお兄ちゃん」

「む、そうなのか？」

疑惑な目で私を見つめるお兄ちゃん

言えない、魔法に絡むことかもしれないからだ

「そうだよ！とにかく、いるからいいでしょ！」

「……わかった」

私の言葉にあまり納得はしてないらしいけど

取り敢えずは、大丈夫のようだ

「……よかった」

？

お兄ちゃんは小声で何かを言ってたみたいだけど聞こえなかった

おまけ

なのは部屋

「ね、なのは……君の兄が僕のことをずっと見ていたんだけど」

「え？そうなの？」

「怖かった、あれはまるで……」

勉強会？その一

「これで……二つ目……」

ユーノ君が机の上で寝ているのを私は椅子に座りながら、見ていた

今まで、共通なのは魔法に頼らざるおえない状況になるということだ

「その想いと糧として、媒体とするジュエルシード」

純粋なものであり、叶えるものによっては酷いものへと変貌してしまうもの

ユーノ君は事故によってジュエルシードがこの地球にばらまかれたって言っていたけど

本当に事故であったのか……

これは『ロストロギア』と呼ばれる、古代文明で造られた遺産のことである。詳しいことはよく理解はできなかったが、実際に見てこれは危険なものだというのがわかる

運ぶのにしたって厳重にしてあるはずだ

（それに……）

私にジュエルシードを集めるように言った男…カラレスという人物
それを何に扱うのか……私にはわからない
「まぁ、いいか」
考えていても仕方が無い
二つがこんなに早く手に入る事ができたのだ
もしかすると残りの三つも早く手に入るのかもしれない
「寝よう」
私は考えるのを止めて、睡眠と取る事にした
今の時刻、午前二時……もう次の日である

ーちゅん、ちゅんちゅん
「ん～」
すずめの鳴き声が聞こえてくるのが分かり、私は目を覚まし、目覚まし時計を止める
鳴る時間の十五分前に止めることができたみたいだ
「ふぁぁぁ」

寝ていたベットから起き上がり、伸びをする
昨日もいろいろってもないけど、あったから疲れているのかもしれない
今更だけど…魔法を使った後って、すこし頭が重い
「ん、っん！」
でも今はすっきり
「今日も一日がんばろう！」
私は自分の姿が映っている鏡を前に、そう宣言した

「んぐ、んぐ」
今日の朝食は食パンで、それにジャムにつけ食べていた
焼けたパンも好きだけど…生の食パンもやっぱりいい
お兄ちゃんとお父さんは道場にて、特訓中
お姉ちゃんは朝は日直らしく、もう家にはいない
お母さんは……

「なのは～？母さん、もう家を出るけど、戸締りは大丈夫？」

「うん！」

翠屋へ行くみたいだ

《なのは……今日はいつ頃からジュエルシードを探し回るの？》

そこで頭の中に聞こえてきたのは、ユーノ君の念話

《そ～だね～……？あ》

思い出した……確か今日はアリサちゃんとすずかちゃんと一緒に勉強会があったはず

でも、どうしよう。もし次のジュエルシードがその二人、または家族に反応してしまったら……

『私』にとって、この世界の人とあまり関わりを持つ必要がないけど、私の中にあるもう一人の『高町なのは』にとっては大切なものなんだ

《ユーノ君も一緒に学校に行こう？》

《え？僕も？》

《学校が終わったら、友達と勉強会をする約束しちゃんたんだ……

どうしても断る事ができなくて、それに…ユーノ君の事をその友達が心配していたし、安心させようかなって》

そうだそうだ、確かあの二人にユーノ君を見せると約束していたような？うん、していたよね

それに、ユーノ君も居てくれた方が助かる事もあるだろうし

《わかった、行くよ》

決まり

（じゃあ、制服に着替えて行こうか）

口の中に入っていたパンを飲み込み、私は部屋に戻っていった

一とことこ

バス停までの通学路を私は一人で歩いていた

ランドセルの中にはユーノ君が居るけど……

「ユーノ君？」

さっきから反応が見られなかったので声かけてみたら

「た、た……て」

何だか苦しそうであったので、ランドセルの中を開けてみると、苦しそうにもがいていたユーノ君の姿が……

「ぷはー、はぁ、ぁ」

空気を思いっきり吸い込むユーノ君

「だ、大丈夫？」

隙間だってあったし、呼吸ができると思っていたんだけど

「せ、狭い」

「教科書はそんなに入っていないと思ったんだけど……」

やっぱりダメだったのだろうか

「じゃあ、私のポケットの中にしようか？」

私の上の服には前に両手で突っ込む事の出来るポケットがある

そちらでも十分ユーノ君が入れるスペースがあるんだけど

ついつい、ランドセルの方がいいかなぁって

そう考えてしまった

ユーノ君が素早くランドセルから出て、ポケットの方に移動すると

「あ、こっちの方が息がしやすいやぁ」

と、呟きが聞こえたため、私はそのまま移動する事にした

私の前方にはバス停があり、そこには二人の少女が立っているのが見ていて分かる

アリサちゃんとすずかちゃんだ

《ユーノ君……》

《分かった》

最後まで確認しなくても、ユーノ君には分かったみたいだ

すぅっと、私は深呼吸をし

（今は、私が『高町なのは』。しっかりしないと！！）

そう気合を入れて

「おはよう！アリサちゃん、すずかちゃん！」

そう、声を掛けた

勉強会？その２（前書き）

いつもながら上手く文章に書けず申し訳ございません

勉強会？その２

「ここは、見て分かるように…一つのりんごが５０円なのだから…
…」

学校の授業中、私は窓の外を見ながらボンヤリしていた

私は既に高校までいっている身……

いまさら小学生の勉強なんて、と思っているくらいだ

「……はぁ」

だけど、私の中にいる『高町なのは』は熱心に先生の話を聞いている
ようであった

この子の身体を借りているため、私はこの授業で重要な点をノート
にまとめていることで、役立ってくれるよう努力はした

……分かるように書いてあるはず

一通りまとめ終わった私は外をボンヤリするしかなかったのだ

（お母さん……お姉ちゃん……みんな……）

今思ったのは、『私』の世界にいるみんなの事だ

自分がいきなりここの世界にやってきたため、いつ、どのような時に移動したのかわからないのだ

そのため、みんなが何をしているのかが曖昧になっている

最後の記憶としては、お母さんはそのまま翠屋に働いていて、お姉ちゃんもそこに就職、一緒に働いているのが分かる。私も、お手伝いとして一緒にいたから分かる

だけど、フィアッセさん、レンちゃん、晶ちゃんのことが雲がかかっているみたいに隠されている感じ

「ああ」

この世界にいることで、私の記憶が薄くなっているのだろうか

私は恐怖で身体が震えてしまった

（はやく、集めないと……）

そうしないと、私がここに居る意味がなくなってしまう

すでにジュエルシードは二つ目

目標の五つまであと三つなのだ

―キーンコーンカーンコーン

先生からの連絡事項などが話終わり、チャイムが鳴った

「え～と、ちょうどいいタイミングでなりましたね。では、高町さん号令を」

「はい」

私の声で、他の生徒が椅子から立ち上がり

「さようなら」

と教壇のところにいる先生へと挨拶する

挨拶し終わったみんなはそれぞれバラバラに散らばっていく

教室から急いで出て行く男の子もいれば、教室内で話し続けている女の子達

その中で私は後者に当たった

「えっと、ランドセルの中に全部入れたかな？」

机の引き出しの中を確認し、私は背中にランドセルを背負う

（……はははは）

最初は恥ずかしい思いでいっぱいであったが、後々からは仕方が無いという方に傾いてしまい受け入れてしまったようだ

「なのは？どうしたの。早く行こう？」

私がランドセルを背負ったのを見たのか、アリサちゃんとすずかちゃんは近づいて声をかけた

「うん」

《ボ、ボクはまだ出なくてもいいのかな？》

《二人には、向こうに着いてからって言ってあるから大丈夫》

そう、私はまだ二人にユーノ君に会わしていない

二人は直にでも見たいと言ってきたのだが、ここで出ると他の生徒からの視線が集まってしまい、注目の的となってしまうからという理由である

（すぐにマスコット的な存在になるというのは目に見えて分かって

いるからね……）

お母さんやお父さん、お姉ちゃんもユーノ君のことを気に入っているし、お兄ちゃんは……まだユーノ君のことを警戒してはいるが、基本的には嫌ってはいない

お兄ちゃんは「なのはの身に何かしら……いや、何でもない」と言いかけてしまったことが気になってしまったけど、まぁバレてはいないはずだ

お兄ちゃんの目がすこし変わったのは二つ目のジュエルシードの時

ユーノ君は『普通に』家から出てきたって言っていたけど

？？？

（……いっか）

お兄ちゃんは話してくれないだろうし……ユーノ君も嘘をついていないみたいだし

一応気には留めておこう……私は思った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7898i/

りりかるなのは？

2010年10月8日14時53分発行